
ホットニュース(平成17年度／第91号)

●今月の業界ホットニュース／パキスタン地震

先月号で、イスラマバードから帰国して彼の地に触れたばかりなのに、先日の大地震には驚きを禁じ得ない。とくに、第一報の崩壊したアパートの写真は、わがチームの通っていたオフィス・H8ブロックに近いF8ブロックにあっただけに、衝撃的であった。まだ現地にいる仲間の情報では、イスラマバードではあのアパート以外はあまり大きな被害はない模様なので、人災的な建物の欠陥かもしれない。

震源地付近は急峻な地形の山間地域も多く、交通網も情報網も寸断されているようで、被害規模は日に日に大きくなっている。部分的にはあるが、救援物資の取り合いで死者も出たというようなニュースが入ってくると、震災後の救援の遅れも人災に繋がっていると思える。

パキスタンの1人当たりGNPは日本のおよそ50分の1にすぎない年間700ドル程度である。被害の大きいカシミール地域はパキスタンでも貧しい地域で、数百ドルにも充たない最貧地域といえよう。逆に言えば充分な救援物資があれば、復旧への取り組みも早く行うことができると思われる。日本でも阪神・淡路以来、ライフラインの確保が喧伝されてきたが、その意味では、大震災時における輸送力確保の重要性を改めて感じたところである。

(代表取締役 堀田 紘之)

●信号待ちに潜む危険

随分前から目につくことが多く、気になっていることがある。それは交差点等での歩行者の信号待ちの状態、車道まではみ出て信号待ちをしている歩行者の多さに驚く。歩行者が多い交差点等ではひどい状態であり、弊社近くの幹線道路でも毎日のように見かける光景である。交差点手前に路上駐停車車両があると、車両による陰のスペースができるせいかこの傾向は更に顕著になる。

これらの人達の共通点は外見からは見あたらない。つまり、老若男女問わず、ひどいときは歩道端から1m程度も車道に出ている場合もあり、左折車のみならず直進車にも接触するのではないかと心配になる。とくに驚くのが、これらの人達に子供連れが含まれている点である。云うまでもなく、幼児は瞬間的な対応力(判断力や運動能力)が劣り、事故に遭う可能性が高い。

たしかに、他人との距離が近すぎるのは気分が良いものではない。ラッシュ時の電車内のように物理的空間が無ければ我慢せざるを得ないのだが、交差点付近ではこの物理的空間を車道につい求めてしまうため、上記のような現象が起こるのである。

限られた空間の中で歩道を整備するため、この物理的空間を歩道上のみに確保することは難しい。したがって、交通事故を未然に防ぐには、公共から提供されるサービス(=歩道整備)以前に、個々人の意識が重要になる。我が子が事故に遭う可能性を低減できると思えば、他人との距離感是我慢できないだろうか。手を挙げて横断歩道を渡る以前に教えるべき事が有る。

(第一計画部 野澤 雅一)

●マニラの高速道路－Eパス・システム

この1年ほどフィリピンの仕事を中心に、ほとんどの日々をマニラで過ごしてきた。住まいは仕事場のある中心市街地から南方に20kmほど離れた郊外で、通勤は車で一部高速道路を利用して40分ほどかかる。有料高速道路にはEパスと呼ばれる日本のETCと同様の電子式料金徴収システムが導入されている。Eパスではタグと呼ばれる通信機を購入して車に搭載するだけで、日本のように専用のクレジットカードを作る必要は無い。支払いはプリペイドやクレジットカード等いくつかの方法から選択できる。料金所は本線上にあり、朝夕のピーク時には現金支払いの車の列が長く連なっているのを横目に、Eパスの車はノンストップで通り抜けでき、かなり時間の節約になっている。

Eパス利用者は年々多くなっているようだが、まだその割合は少なく観察では1割強程度と見ている。一つの要因はタグが1800ペソと高いことで、日本円では3600円程度だが、現地では最低賃金の月給の1/4程度に相当する高価なもの。

Eパスはいつも利用している南部高速道路では便利だが、運営が異なる北部高速道路ではまだ使えない。マニラの高速道路は南と北に延びる都市間高速道路が環状道路まで繋がっているだけで、ネットワークとしてはまだ機能していない。北部高速道路では異なるシステムが導入されるのだろうと考えていたが、幸いEパスと同じシステムが今後導入される予定と最近聞き、交通計画に携わるものとしてはほっとした気分になった。

一方、都市鉄道は現在3本開通しているが、料金支払いシステムは各々異なり、統一化される動きはない。日本でもこのようなシステムの統一には時間がかかっているが、都市内鉄道や高速道路そのものの整備が遅れているマニラでは、新路線整備が計画される時点で統一的なシステムの導入を検討し、利用者の利便性につながる連携が最初から行われることを望むとともに、その構築に携わる機会に接することができればと考えている。

(海外室 増島 哲二)

アルメックホットニュース(平成17年10月15日発行)

////////////////////////////////////